

書 評

山本理佳 著

『近代化遺産』にみる国家と地域の関係性』

古今書院 2013年2月 247頁 5,200円+税

日本にヘリテージツーリズムという用語が現れ、浸透してからでも久しい歳月が経過した。近年は、廃墟ブームも手伝ってか、炭鉱、工場、鉄道、造船所などの産業遺産に関するガイドブックが書店を賑わしている光景を目にすることも多くなってきた。そうした産業革命期以後の遺産に歴史的価値を見出し、研究・保存に寄与する産業考古学がイギリスで提唱されたのは1950年代で、日本の産業考古学会の設立は1977年であるから、国内でも四半世紀以上の歳月が流れたことになる。

その結果、観光立国の提唱のもとに、その手段として近代化遺産を活用する自治体も増加することになった。群馬県が富岡製糸場など一連の近代化遺産をユネスコの世界遺産に登録する努力をつづけているのは、その一例であろう。そして、地理学教育の場面においても、そうしたテーマの卒業論文に接する機会も増加してきた。

ところが、こうしたテーマを本格的な学術論文にまでつなげた研究といえば意外に少ない。そのため評者は、そうしたテーマで論文をまとめる学生の指導には少なからず頭を悩ませてきた。そうしたなかで本書の著者は、10余年前から本誌や『地理学評論』などに、「近代化遺産」をテーマとした論文を掲載し、地理学的な研究方法を提示してきた先駆者の一人である。最近になって、それら既存の成果に新稿を加えて学位請求論文を提出され、2011年3月にお茶の水女子大学大学院から博士（社会科学）の学位を授与された。その成果をもとに、一書にまとめられたのが本書ということになる。そして、2013年4月からは愛知淑徳大学交流文化学部で教鞭を執られる、斯界の新進気鋭の研究者でもある。そうした新境地を開かれた著書に対し、まずは書評の慣例に倣い、内容を要約しつつ若干のコメントを付してみたい。

本書は、第Ⅰ部「本書の分析枠組み」、第Ⅱ部「北九州市における産業施設の『近代化遺産』化」、第Ⅲ部「佐世保市における軍事施設の『近代化遺

産』化」が各々2つの章から構成され、それらの前後に序章と終章を配置している。

序章「問題意識と目的」では、本書の主題である「近代化遺産」を、国家の存在を象徴的に強化し、国民のアイデンティティを醸成するものと位置づけ、地域の国家に対する従順な関係性にもとづき国家を支持する強力な媒介項だと位置づけている。そして、本書は、近代化遺産に関わる多様な資料、データをイデオロギー的機能や意味づけから読み込む方法を探るとしている。

本論第Ⅰ部を構成する第1章「現代的国家支配と『近代化遺産』」では、まず萱野稔人の説を援用しつつ、国家の近代的变化において資本主義がファンダメンタルな動力として機能したという点に着目している。そのうえで、まず国土と強固に結合した国家支配を「近代的」、対して多国籍企業の増加や国内産業の空洞化を国土と乖離したものとみなして「現代的」としている。それゆえ往年の「近代的」国家支配の遺産としての「近代化文化遺産」が、明治以来の夢を背負う懐古主義的イメージが強まり、ウケがよいのだという。評者は萱野説の原典を未参照ながら、当該箇所に近代的と現代的な国家支配が単純に対置できるのか、という疑問を抱いた。そうした解釈では、「現代的」に齟齬なき国内産業の空洞化はともかく、戦前の在華紡（中国本土に進出した日本資本の紡績工場）や明治期既に世界的商業ネットワークを誇った三井物産の活動なども「現代的」になってしまうのではないかと。また、逆に「近代化遺産」ではないが、それに先立つ近世以前の文化財との関係をどのように捉えるのであろうか。それらには近代的「国家」は未成立でも、「鎖国」的支配ゆえにより強固な国土との関係が見られたはずである。

そうした違和感の一方で、図1-1の国会における「文化」関連概念の出現頻度の推移を示したグラフには興味を抱いた。「文化」や「環境」といった用語は守備範囲が広く、ともすれば何にでも使うことが可能なため、近年は無意識に濫用されているケースが多い。ところが、同図によれば、実は大戦直後の時期の方がその頻出度が高いという意外な結果を示している。著者はそれを「軍国

主義」払拭のねらいで多用したと見ているが、評者もまたそれに同感である。

第2章『近代化遺産』の構築実践における戦略と戦術』では、地理学の景観研究における経験・イメージ研究の視点から、「近代化遺産」の保存活動の実践の変化を説明しようとしている。まず、近年の地理学の景観研究において国家イデオロギーを担う「地域」の存在がクローズアップされ、同時に「文化論的転回」から「物質論的転回」へと変化してきたという。そして、折しも1980年代以後の文化庁主導の「近代化遺産」研究では「国家」の枠組みが強調され、そこに「国家」―「地域」の関係が生じたとする。たしかに遺産そのものは「物的」かもしれないが、それを解釈するという行為を伴えば、「文化論的」になってしまうのではないかという素朴な読後感が残った。

つぎに北九州市を事例とする第Ⅱ部を構成する第3章「近現代重工業都市の変容」は、次章の前提として同市の第二次世界大戦後から1970年代の「鉄冷え」時代までの動向に主眼を置いている。「企業都市」と位置づけられる北九州市は、当該期に産業生産額における工業の割合、工業出荷額に占める鉄鋼業の割合の低下を各々経験した。これらによって北九州工業地帯が、四大工業地帯から脱落したことは、評者自身も地誌の授業で毎年話していることである。そうした変化のなかで、著者は1970年代前半まで存在した製鉄所内作業従事者の3～4層の序列とそれを反映した従業員の住宅配置に着目している。従業員の序列自体は鉄鋼業を含めた巨大装置型産業では自明ながら、それを空間に投影させると、あたかも近世城下町の居住地分化を彷彿とさせる。まさに企業「城下町」ならではの景観であることを感じた。そして、それは重厚長大型産業が第三次産業へと移行した後も、管理職（候補者）の主要居住地であった地区が商業的發展を遂げ、対して工場労働者のそれが衰退するという地域間格差として残影することを、ハーヴェイの指摘を引用しつつ考察している。

第4章「産業施設の『近代化遺産』化」は、八幡製鉄所の東田第一高炉の保存問題を具体的事例として考察している。同高炉は、1901年の開設ながら10回におよぶ改修を経て1962年に大幅拡張を

行ったため、当初所有者の新日本製鐵は、それに歴史的価値を認め難いとして保存の意義なしとした。しかし、住民側、特にホテル業者A氏は文化イベントとの関わりで、その保存の意義を見出し、折しも文化庁が推進していた「近代化遺産」の基準との関係で「建造物」ではなく、「場所」（＝遺跡）としての意義を強調することにしたという。その結果、1996年に市の指定史跡、2003年に保存が実現したが、その過程を、著者は非所有者である住民側が戦術的になし得る実践として捉えている。そうした保存に至るプロセスを詳細にレビューした意義は大きいですが、一方で対象となった高炉の「物的」遺産に関する叙述が少ないため、工業都市である地元での「遺産」としての意義は理解できるとしても、それがなぜ他地域から観光客を呼び得る「文化イベント」の目玉となり得るのかが、明確に伝わらないように思われた。

そして、佐世保市を事例とした第Ⅲ部を構成する第5章「近現代軍事都市における変容」では、まず同市が海軍工廠所在地として明治期以来軍関係者や工廠労働者を都市人口の大きな構成要素とする点に特徴があったことを指摘している。しかし、第二次世界大戦後は、造船業が主導しながらも、衰退してゆく炭鉱業や、代わって基盤産業化してゆくサービス業によって多角化するかに見えたが、朝鮮戦争を機に軍事拠点への逆戻り現象が顕在化することになったという。行政は、当初そうした傾向を承けて米軍基地容認の政策を推進したが、1960年代末のエンタープライズ入港を機に米軍所在の矛盾が露呈し、軍事施設用地の一部が公共施設への転用を余儀なくされた。そして、著者は1960～70年代の『市勢要覧』の悉皆調査を通して、行政側の米軍存在の矮小化政策の一方で、それらが住民側からは自国より米軍防衛の印象を与えるものであったことを指摘する。

近年、論文集『軍港都市史研究』（清文堂、I・II既刊）や谷澤毅『佐世保とキール海軍の記憶 一日独軍港都市小史一』（塙書房、2013年）など、軍港都市への関心が急速に高まっており、著者もまた前者の執筆者の1人である。そもそも著者が本書に集成された研究の発端は、15年前の佐世保での「戦前の軍港は今と比べてどうだったんでしょうか？ どのように違うんですか？」という素朴な質問に対する、古老の「もう全然違

う。戦前と今ではだいぶ変わっている。別物だ」という答えにあったという（「はじめに」 i 頁）。それを踏まえれば、本章こそが本研究の原点、その対照性の描写こそが著者の最も伝えたかった点なのかも知れない。前掲の谷澤著書においても、日独両軍港都市の第二次世界大戦前後の比較考察が重要な主題であり、著者の示した第二次世界大戦をはさむ前後の時期の比較という論点は今後の軍港都市分析の重要な研究視角の1つを成すのであろう。その一方で谷澤著書も含めて同様な軍港都市間の比較という視点が欠落しており、米軍基地の置かれた横須賀、一方で自衛隊基地の置かれた呉や舞鶴などとの比較が、事例都市の客観的評価のためにも不可欠な作業のように思われた。

第6章「軍事施設の『近代化遺産』化」は、そうした「機密性」を余儀なくされる軍事関連都市が「近代化遺産」化するうえで不可欠な「公開性」という背反条件をどのように克服してゆくのが主題となっている。実際、「近代化遺産」と評価されている旧軍施設の多くが現役であるため、公開以前に「近代化遺産」としての総合調査自体も制約され、ましてや公開に踏み切れないものが少なくないという。そこに著者は、佐世保の「近代化遺産」と日米両国の防衛戦略間の矛盾を見出している。軍事施設としての機密性と文化財的価値の公開性の矛盾自体はよく理解できるが、それを本書全体の主題である「国家と地域の関係性」という論点と接続するうえでは若干の疑問を感じた。なぜなら、文化財的価値にもとづく公開の推進には地域のみならず、文化庁も関与しており、それを防衛庁（当時）との「政庁間関係性」に置換可能とすれば、地域不在の議論に陥るように思われたからである。

これらの内容を承けた終章「結論」において、著者は文化遺産をめぐる地域の国家に対する従順な関係性の再考を指摘し、単なる受容ではない戦術的実践の展開と、国家に安易に順応せず主体的たらんとする関係性の2点を指摘し、現代的な国家の編成原理やナショナリズムと、近代のそれらの峻別を指摘して全体を結んでいる。

個々の箇所での疑問点は既述したので、最後に

全編に関わる所感を述べて拙稿を終えることにしたい。まず、本書全体を通じて対象となった「遺産」そのものの文化財的価値、特に日本全体の同種の文化財における産業考古学的（あるいは産業技術史的）意義を、より明確にすることで、読者にその地域との関係がより伝わりやすくなると感じた。本書の事例には著名なものが多いとはいえ、八幡と釜石や輪西（室蘭）、佐世保と呉や舞鶴などとの差違により詳細な言及があれば、その保存の意義がわかりやすかったであろう。

つぎに本書の主題をなす「国家」と「地域」についてである。第3章では「国家」たる文化庁と「地域」たる北九州市とその住民が連携し、遺産所有者である新日本製鐵に向き合い、逆に第4章では「国家」たる防衛庁（当時、その背後の米軍も含む）に、「地域」たる佐世保市とその住民が連携して対立するという構図が読みとれた。そうだとすれば「国家と地域の関係性」の各々の属性がまちまちで、評者なりに子細に読み進めたつもりでも、特に「国家」の出先でありながら地域の運営者でもある地方自治体の立ち位置がよくわからなかった。さらにその上位にある県はいずれにも姿を見せなかったように思われる。そのためサブタイトルである「国家と地域の関係性」は、一面では読者の理解を助けているに違いないのだが、一方でやや混乱を招く要因にもなっているように感じた。もっとも、それに代わり得るサブタイトルを求められても、評者に名案はないが。

近年学生の卒業論文を指導していると、歴史地理学に属す、ないしはそれを意識したテーマであっても、かつてのように歴史的現象の研究より、本書のような現代との関係を視野に入れた研究が増加していることを感じる。しかし、地理学分野でそれに一定の体系性を与えた先行研究は意外に少なく、正直なところ指導する立場でも手探りであったといわざるをえない。それを助ける力強い存在として本書を推薦したい。また、関連分野に関心をもつに過ぎない評者ゆえに、本稿には誤読や曲解が少なくないと思われる。著者には失礼な叙述があることをお詫びしておきたい。

（三木理史）

河原典史 編

『カナダ日本人漁業移民の見た風景 前川家
「古写真」コレクション』

三人社 2013年3月 197頁 2,800円+税

本書は、近代期のカナダへの漁業移民に関する調査研究に取り組んでいる河原典史が、カナダ日本人漁業移民の1家である前川家に関する古写真や回想録を編集したものである。本書は、カナダにおける日本人移民史や漁業史に関する、純粋な学術研究書とは異なる。しかし、本書では、カナダへ移住した日本人の一家族の成長を通じて、学術研究書では十分検討されてこなかった移民の生活の実態が明らかにされており、移民史や漁業史研究にとって大変独自性に富み意義深い成果となっている。

はじめに、本書の構成と内容の概略を紹介する。

刊行によせて

家族の思い出（山口静代）

Maekawa Photographs of Ucluelet (Stanley T. Fukawa)

解説

前川家コレクション—バンクーバー島西岸の漁業開拓者たち（河原典史）

前川家写真コレクション

- I 前川家のふるさと
- II バンクーバー・キャナリーの人々
- III ユークレットの漁業開拓
- IV ユークレットの前川家
- V ユークレットでの学び
- VI ユークレットの若者たち
- VII 1936年の建国記念日（ドミニオンデー）の集い
- VIII レモンクリークでの生活
- IX ロードキャンプでの様子

回想録

無名の勇士（前川佐一郎）

1942年以前のユークレットの日本人漁業コミュニティ（前川 S. ラリー）

The Japanese Fishing Community of Ucluelet Pre-1942 (Larry S. Maekawa)

資料編

地図 カナダにおける前川家の活動地

地図 前川家のふるさと

年表 前川家の歴史

家系図 前川勘蔵をめぐるファミリー・ツリー
（第二次世界大戦以前）

新聞記事 船英一路『晚香坡島西海岸を訪ねて』（大陸日報より）

古写真との出会い—おわりにかえて（河原典史）

まず、「刊行によせて」では、前川家の当主勘蔵氏の長女であり、大正12（1923）年にカナダで生まれ、昭和21（1946）年までカナダに居住していた山口（旧姓・前川）静代氏と、カナダ日系博物館のスタン府川氏の2人より、序文が寄せられている。

次に、「解説」では、編者である河原により、バンクーバー島西岸の日本人漁業移民と、前川家の概要についてまとめられている。カナダでは、ブリティッシュコロンビア州の大河川の河口部に多数のサケの漁場やサケ缶詰工場が成立し、多数の日本人漁業移民がこれらの労働に従事していたが、大正前期より生産量が落ち込んでいた。大正8（1919）年、和歌山県日高郡三尾村出身の上出邦蔵が、バンクーバー島西岸の沖合に大きなサケの漁場を発見して成功したことを契機に、バンクーバー島西岸への日本人漁民の移住が相次いだ。また、前川家について、当主勘蔵氏は明治15（1882）年に和歌山県東牟婁郡西向村（現、串本町（旧、古座町））古田地区で生まれ、明治32（1899）年にカナダへ単身移住した。その後、家族を呼び寄せ、大正13（1924）年にはバンクーバー島西岸へ移住し、昭和17（1942）年に第二次世界大戦に伴う強制移住のため内陸部のレモンクリークに移住した。昭和21（1946）年、前川家の長男であり、静代氏の兄である前川佐一郎氏を除き、前川家はカナダから帰郷した。

続いて、「前川家『古写真』コレクション」は、前川家の家族の成長に沿って、経年的に古写真が収録されている。なお、本書に収録された古写真は、山口静代氏の序文によれば、「日本に残した両親へ子供たちの成長を知らせよう」（i 頁）として、勘蔵氏の妻であり静代氏の母である前川よ志彥氏が撮影し残したものである。「I 前川家のふるさと」では、前川家の家族の集合写真や故

郷周辺の風景、横浜とバンクーバーの移動手段であった氷丸丸の様子が判明する。また、前川よ志系氏の渡航許可証も収録されており、古写真と並び資料的価値が高い。「Ⅱ バンクーバー・キャナリーの人々」では、前川家がバンクーバー島西岸へ移住する以前の暮らしの様子が判明する。とくに、本書に収録された古写真の中でも古い明治43(1910)年頃の船大工を撮影したものや、大正6(1917)年の造船所の様子を撮影したものも含まれている。また、共同国民学校での集合写真には、白人と日本人が同じ学校で学んでいた様子がわかる。

「Ⅲ ユークレットの漁業開拓」から「Ⅶ 1936年の建国記念日(ドミノンデー)の集い」にかけては、前川家がバンクーバー島西岸にあるユークレットへ移住した後の古写真が収録されている。「Ⅲ ユークレットの漁業開拓」は、トローリング漁船が多数係留されている様子や造船所、湾上に浮かぶ漁者組合の建物等、当時の日本人漁業移民の漁業や集落景観が判明する。「Ⅳ ユークレットの前川家」は、前川家の子どもたちの成長や、ピクニックをはじめ家族の行事の様子がわかる。これらの古写真は、山口静代氏の序文を踏まえると(i頁)、撮影した前川よ志系氏が最も残しておきたかった古写真と位置づけられる。「Ⅴ ユークレットでの学び」では、日本語学校によるサマーキャンプ等の学校行事や、ピクニックといった家族の行事をはじめ、教育や娯楽の様子が判明する。さらに、婦人会による手芸サークルといった活動も写されており、日本人女性だけでなく少数ではあるが白人女性も参加していたこともわかる。「Ⅵ ユークレットの若者たち」では、成年男女の交流や、季節労働に來た女性たちが示されている。「Ⅶ 1936年の建国記念日(ドミノンデー)の集い」では、昭和11(1936)年7月1日のカナダ建国記念日において、競泳や漁船競争、日本舞踊といった催しにたくさんの日本人移民の集う様子が判明する。

「Ⅷ レモンクリークでの生活」と「Ⅸ ロードキャンプの様子」は、昭和17(1942)年にレモンクリークへ強制移住させられた後の古写真が収録されている。これらの古写真から、強制移住先においても、移住者の間で、パーティやピクニック、カルタ大会をはじめ、さまざまな交流がみら

れたことがわかる。なお、本書には、昭和20(1945)年に撮影された古写真まで収録されている。

さらに「回想編」では、前川勘蔵の長男である前川佐一郎による、「前川佐一郎」名義にて平成12(2000)年に日本語で書かれた父勘蔵氏の経歴に関するものと、「Rally S. Maekawa」名義にて平成21(2009)年に英文で書かれた自身のカナダでの体験に関するものの、2つの手記が収録されている。

最後に、「資料編」では、前川家の移住先に関する地図や家系図に加え、昭和11(1936)年にカナダの日系新聞である『大陸日報』に連載された、バンクーバー西岸の日本人漁業移民の生活を取材した新聞記事を収録している。

本書を通じて、まず、古写真や手記という、従来の文献史学では十分検討されてこなかった資料を通じて、カナダ日本人漁業移民の生活の実態を明らかにした点が注目される。河原は、本書をはじめとする一連のカナダ日本人漁業移民研究の目的ついて、「文献史学をはじめとする先行研究との差別化を目指し」(194頁)、「行政文書やオーラルデータに過大に依拠してきたカナダ移民史研究に対して、本書で活用した資料、とくに古写真からの検討は今後のカナダ日本人移民史への試金石でありたい」(vii-viii頁)と記していた。そして、古写真を検討した結果、カナダ日本人漁業移民の開拓の過程を可視的に明らかにするとともに、日本語学校をはじめ教育環境が整備されていたことや、ピクニックや婦人会の手芸サークルをはじめ家族や学校、地域社会でさまざまな娯楽が存在したこと等、詳細な生活の実態が解明されていた。さらに、山口静代氏の序文や前川佐一郎氏の手記をあわせて検討した結果、白人による日本人への排斥が経済的な状況に応じて変動がみられたことや、白人の中には排日家だけでなく親日家も存在したこと、日本人の漁民と仲買商との間でも対立がみられたことも明らかにされた。これらの成果は、河原の批判する「行政文書やオーラルデータに過大に依拠してきたカナダ移民史研究」(vii頁)に対し、古写真や手記といった地域住民が直接作成した資料を活用することで、「排斥する側として一様にとらえられることの多かった白人についても、排日家・親日家双方からのまなざし」(vii

頁)の再考の提唱や、「パイオニアとしての賞賛、あるいは排斥に堪えるカナダ日本人漁業者という短絡的な説明だけではうかがいきれない生業史」(vii頁)の解明に成功したといえる¹⁾。

このような本書の成果は、山口静代氏に和歌山県へ帰郷後「誰にも話すこともな」かったカナダでの経験を語る機会を設定し(i頁)、さらに古写真の開示へとつながった、河原による丹念なフィールドワークのたまものといえる。本書は、たんにカナダ日本人移民史に新知見を提示したのみにとどまらず、聞き取り調査や地域住民の直接作成した資料の収集による生活の実態の復原という歴史地理学特有のフィールドワークが、文献史学をはじめ隣接諸分野では捨象されてしまう地域住民の視角に立ち新知見を提示しうることを、河原が実証したものと評価できる。

また、本書に収録された古写真には、すべて英文キャプションが付されている点も注目される。近年の人文諸科学では、文献資料にとどまらない、絵画や民具、そして本書で注目された古写真をはじめ、さまざまな非文字資料への研究対象の拡大や資料論の充実が進められている。本書では、移民の古写真という、国際性をもつ非文字資料に注目している点で、既存研究を一步先へと展開させている。

一方、古写真という資料の特性について、より詳細に検討していきたい。「前川家『古写真』コレクション」のうち、「IV ユークレットの前川家」に収録された前川家の家族写真は、前川よ志系氏が故郷の両親にみせるため撮影した家族の成長の証であり、前川家にとって家宝ともいえる古写真群と位置づけられよう。調査論の視角でみれば、これらの家族写真は、河原の提唱する調査法である、インフォーマントの記憶を呼び戻すための「装置」として最も有益な資料となりうる²⁾。しかし、前川家の家族でもなく、カナダ移民史や漁業史に関する調査研究に従事していない読者が、前川家の家族写真をみた時、貴重かつ興味深いものであると直感的に感じるものの、どのように資料的価値をみいだせばよいか判断がつきにくかった。

そもそも、前川家の家族写真に限らず、古写真の多くは、あくまでプライベートな思い出を残すために撮影された性格をもつ。このため、被写体

の多くは、家族を中心とした人物が中心となることが多い。このような古写真の特性を踏まえ、本書では古写真にみえるさまざまな人物の集合のあり方に注目することで、カナダ日本人漁業移民の生活において教育や娯楽が充実していたことや、排日感情と親日感情の混在等が明らかにされ、排斥史観に依拠したカナダ移民史研究に対し新知見の提示につながっていた。また、本書の研究視角以外にも、人物の服飾や髪型といった風俗や、人物の背景にみえる景観等、さまざまな検討も展開しうる。つまり、本書に収録された古写真は、カナダ日本人漁業移民の移民史の側面について検討する上で、大変有益な資料となっていた。ただし、古写真を通じて、カナダ日本人漁業移民の漁業史の側面を検討しようとしたとき、たとえば、最も把握しておきたい内容の1つである日本人漁業移民による漁業の実態に注目しようとすると、造船所の様子や漁船の停留する入り江の様子が収められており、漁船の構造や規模、船舶数等から漁業の一端を把握することができたが、十分明らかにされていなかった。

さらに、本書に収録された古写真の撮影年次について、最も古いものは明治43(1910)年に撮影されていたが、大半は大正中期以降に撮影されたものであった。一方、前川家は明治32(1899)年に当主勘蔵氏がカナダへ移住してカナダでの生活基盤の整備を開始しており、大正13(1924)年には家族でユークレットへ移住していた。また、写真機は、家計がある程度安定しなければ購入されにくいと推察される。つまり、本書に収録された古写真は、あくまで前川家の家計がある程度安定してきたとみられる、大正後期以降の様子を撮影したものであった。このため、前川家がカナダにおける生活基盤を確立していった時期にあたる、明治中期から大正前期における生活変化については、古写真がほとんど存在せず十分明らかにすることができない。

これらの課題をめぐって、本書では、古写真とあわせて収録された、前川佐一郎氏による2編の手記や新聞記事を通じて、前川勘蔵氏のカナダへの渡航からユークレットへの移住と漁業の拡大といった、前川家を中心としたカナダ日本人漁業移民による漁業開拓の展開が詳細に明らかにされていた。また、河原の他の研究では、前川家と

同じくバンクーバー島西岸に居住し、塩ニシン製造業に従事していた嘉祥家の古写真をはじめ、家族写真としての性格が弱く、漁業の様子を中心に撮影した古写真の存在が確認され、すでに検討が進められている³⁾。このように、評者が指摘するまでもなく、古写真の資料的限界について、本書や河原の研究ではすでに十分配慮されていた。

以上を踏まえ、古写真を用いることで、河原の指摘する通り、行政文書やオーラルデータに依存した文献史学とは異なる、移民の詳細な生活実態を明らかにすることができる。しかし、河原もすでに配慮していたが、古写真によってはあくまで家族写真としての性格が強いために生業をはじめ検討しにくい内容があることや、古写真という資料の残存する時期の限定といった、古写真にはさまざまな資料的制約も存在していた。本書において、河原は、古写真の検討を通じた、移民史研究における文献史学との差別化と、歴史地理学の独自性の確立をめざしており、大変意欲的な取り組みとして注目される。評者は、河原自身も課題に挙げていた、「カナダ日本人漁業移民史を再検討し、それを編む」(viii頁)ことで、歴史地理学の視角から独自性をもつカナダ日本人移民史や漁業史の体系的な学術研究書が発表される機会を待ち望んでいる。

(花木宏直)

[注]

- 1) このような問題意識や、問題意識にもとづく研究成果は、主に以下の論考に詳しい。①河原典史「第二次世界大戦以前のカナダ西岸における日系造船業の展開—和歌山県出身の船大工のライフストーリーから—」立命館言語文化研究17-1, 2005, 59-74頁。②河原典史「カナダ・バンクーバー島西岸への日本人漁業者の二次移住—クレヨコット・トフィーノ・バムフィールドを中心に—」(米山 裕・河原典史編『日系人の経験と国際移動 在外日本人・移民の近現代史』人文書院, 2007), 147-171頁。③河原典史「『前川家コレクション』にみる女性と子供たち—カナダ・バンクーバー島西岸の日本人」京都民俗28, 2011, 111-130頁。
- 2) 河原典史「日系カナダ移民のライフストーリーをめぐる調査法の再考—実証的な生業研究にむけて—」立命館言語文化研究17-4, 2006, 3-20頁。実際に、本書における山口静代氏の序文には、古写真をみながら、被写体の内容にとどまらない、さまざまな記憶を連関して想起していく様子が、以下の通り記されている。「写真を1枚1枚眺めると、日本人だけでなく白人のことも思い出されます。私たち日本人に土地を提供してくれたフレーザー老人、やせていたので骸骨をもじってあだ名をつけた小学校の先生……その『コツコツ先生』には、授業中に日本語を話すとよく怒られました。また、インディアンは工芸品を作り、私たちに物々交換を依頼しにきました。彼らは鳥葬をし、お葬式では泣きばばあが参席していたことも記憶しています」(i頁)。この記述から、河原の調査法が有益であることが実証されている。
- 3) 河原典史「1920年頃のカナダ・バンクーバー島西岸におけるニシン漁業の漁場利用—調査報告書と古写真から—」国際常民文化研究叢書1, 2013, 173-184頁。